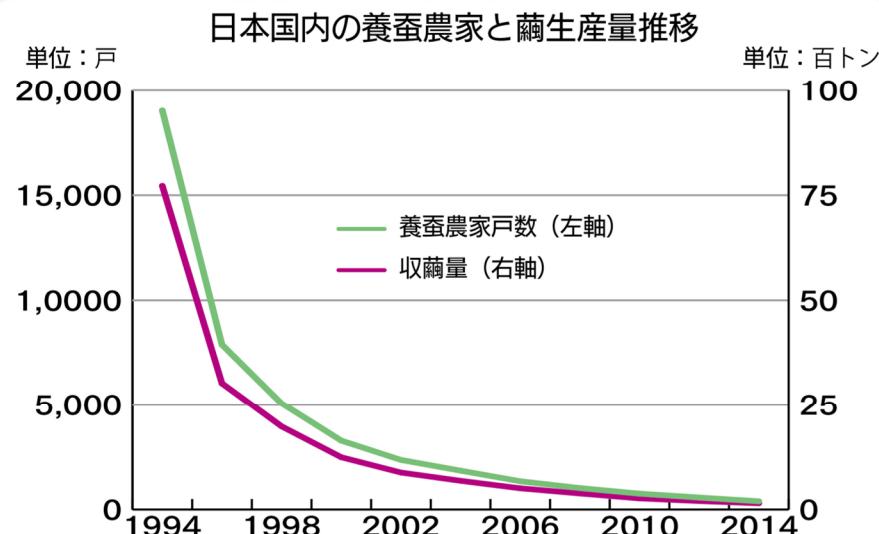


蚕糸業の起源と歴史

養蚕は約6千年前の中国に始まり、日本へは紀元前200年頃に伝わったとされています。奈良時代頃には全国に拡大し、生活や文化に浸透していきました。

明治に入ると製糸の機械化が進み、養蚕・製糸業(蚕糸業)が一層活発化。明治から大正の頃は、輸出品の4~7割を生糸(絹)が占め、世界一の生糸輸出国となった日本の蚕糸業は、近代化を支える重要な産業でした。昭和に入っても勢いは衰えず、最盛期の1930(昭和5)年には全国の4割もの農家が養蚕を行っていました。



蚕糸技術力の危機

これまで日本の蚕糸技術力が世界を牽引してきましたが、1940年頃に登場した合成繊維に需要を奪われ、生産・輸出とも急速に縮小。現在では、日本国内の養蚕農家は365戸、ピーク時の約220万戸と比べ、実に6千分の1にまで減少しています。世界的に見ても蚕糸業の縮小傾向は否めませんが、生糸生産量は中国に、品質ではブラジルに先行されていて、日本が誇る蚕糸技術力が、現在存亡の危機に陥っています。

「山鹿シルク」への期待

一方で、長い間日本人と蚕が紡いできた伝統的な蚕糸業の歴史は、新たな局面を迎えつつあります。化粧品や医療用などへの新たな用途開発によって、世界的にも需要が高まり、日本の企業や研究者が、世界に先駆けた遺伝子組み換えや、最新設備導入による新たなシルク創造に着手しています。

このような中で、本市に来春完成する世界最大の「周年無菌養蚕工場」には、高い注目が集まっています。

今まさに、新たなジャパンシルク産業の誕生が待ち望まれているのです。